

春燈

12月号

December 2012



主宰の句

安立公彦

去りやらぬ蜉蝣ひとつ外人墓地

(横浜二句)

居留地の名残や紅き曼珠沙華

鹿笛を吹く青年や月の原

新蕎麦や信濃に古りし旅の宿

声かけて洗ふ子の墓遠ひぐらし



子が嫁さば春昼琴の音も断たむ

『午前午後』昭和四十一年

父の心情はなかなか伝わりにくいもの。子を思う多くの敦句の中でひときわ私の心を打つ一句。むしろ無音界の抒情を多く詠まれた中に、珍しく春昼の琴の音が嫋やかに聞こえてくる。それは恰も父の愛が封印を解かれて迸りでてきたような句である。多忙を極められた先生の日常の中で、唯一慰められる聖域がこの琴の音だったのだろう。華やかで淋しい一句。父の愛はいつも孤独。

高橋和女

くちすへばほほづきありぬあはれあはれ

『まづしき饗宴』昭和十年

この句は第一句集『まづしき饗宴』に収められた。戦前の句集で、いわゆる敦の女給俳句。このテーマはフィクションだったと、先生に近かった人から聞いた。私が紹介者もなく春燈に入り、結局最後までやめなかったのも、新興俳句の中でも稀有なこの句の感傷ゆえだった。先生は後にはこれらの句をあまり評価されない傾向もあったと聞いたが、私には女給俳句あつての敦俳句だった。

森 下 賢 一

燈下集



○ 太田佳代子

ため息を封ざるひと日小鳥来る
打ち明けて同じ思ひの草の花
全クラス授業中なる帰燕かな
胸にまだ人恋ふ力曼珠沙華
長き夜を充電中の電話かな

○ 荻野嘉代子

秋天の晴れすぎてゐる不安かな
秋灯下机上に辿る江戸の町
夢に見し花野探して一両車
猫ばかり声かけくるる敬老日
手ざはりを楽しんで剥く梨ひとつ

○ 久保久子

○ 金山雅江

北斎の雨の斜めや走り蕎麦
こふの鳥の番仲好く露に濡れ
三島由紀夫の「剣」の一文字露しとど
看取り妻同士の話夕月夜
月白や尺八の音の陰と陽

葛咲くや匿しとほせぬ恋の嘘
不意にくる思慕の波状や居待月
秋光の未来を回す風車かな
残照の波間に秋を惜しみけり
夕霧に一舟もどる浦伝ひ

○ 廖 運 藩

啄木鳥や隣る家無き柚の宿
木叩きや木魚小兵の尖り声
木叩きや撲たれて禿げる大木魚
木叩きの月月火水木金金
啄木鳥の終日つつく大啖ひ

○ 渡 邊 泰 子

野仏の風に声ある猫じやらし
太刀魚の諸刃の剣にひるみけり
小鳥くる石ころアートの猫のひげ
万葉のこころの翳へ帰燕かな
野菊咲く島に客死の小さき墓

○ 生 方 義 紹

忙しげに棚経僧の茶を啜る
釣銭にまざる新札秋涼し
とき色のパンツルツクや初風
行きずりの目礼かはす秋彼岸
コスモスの公民館に歌ひをり

○ 久 米 憲 子

吾亦紅富士を大きく揺らしけり
連れ立つも思ひそれぞれ萩の径
秋風に座して言問団子かな
水菓子を好みし子規の忌なりけり
一葉落つ忘れてならぬ人ばかり

○ 小 倉 陶 女

衿元をからかかつて行く秋の風
伝はらぬ心の綾や秋扇
秋思とも恋とも汀歩きけり
九月尽人と離れて海を見る
いささかの貯へありて無月かな

○ 荒 井 慈

新発意の檀家まはりや竹の春
八朔やしまひ込みたる皿を出す
十五夜や三人の子も家庭人
アンニュイな兔の眠る無月かな
秋深し古希目交の投句かな

春星賞受賞作（20句）

淡海

小島 昭夫

比良八荒靈松確とたちろがず

最澄の往還の径すみれ咲く

北嶺や受難に耐へし巨樹芽吹く

あはあはと明けゆく湖や諸子舟

千年の御堂にひびく初音かな

藩主なき城をとりまく桜かな

花吹雪わづか五年の都跡

鎮魂の湖へ夕鐘春おちば

夏来る三鬼の一句おそるべし

石積みの技継ぐ裔や虹二重

漕ぎ出づる六月の湖藍ふかし

白き齒の男ヨットの帆を揚ぐや

ふたりして跣足になりぬ汀かな

ビール酌むいつしか歌ふ周航歌

いにしへの息吹を頬に大夕焼

短夜の夢かうつつか浮御堂

こそばゆき天道虫を弾きけり

光源氏の生れし伽藍やほととぎす

悠久の青嶺に沈む夕日かな

葭切を啼かせて淡海暮れにけり

春星賞 佳作（20句）

山 眠 る 近 昌 夫

冬の虹煙突高くのこりけり

梅かをる渡り坑夫の墓標かな

渡良瀬川の源流はるか残る雪

いたどりを噛む石塊の小径かな

坑口にのこる鑿あと草いきれ

なんびとも寄せぬ廃鉱ほととぎす

梅雨深し川のほとりに寺一字

瑠璃とかげ長屋の跡に棲みてけり

備前楯山の露頭を染むる夕焼かな

青葉木菟月の光に眠りけり

せせらぎに交じる河鹿の高音かな

禿山に植うる緑やたゆみなく

廃鉱のあかがね色のすすきかな

葛咲いて坑口堅く閉ざしけり

採掘を終へし足尾や山眠る

遠き日の足尾千軒しぐれけり

風花のまつはる髪やがれの道

着ぶくれて一人訪ぬる峡薄暮

注連張るや通洞坑の五百年

廃坑に風つきささる寒の入

当月集

安立 公彦選



○ 小山 繁子

秋澄むや猫も耳かす遠汽笛

赤い靴履いて誰待つ桐は実

海境へ秋日曳きゆく貨物船

風まとふ外人墓地や木の実落つ

恙なく一ト日の芙蓉閉ぢにけり

○ 藤原 若菜

鉄塔に懸かる残暑や月赤し

草の穂やとぎに激しき鳥のこゑ

こほろぎの座敷わらしを呼びにけり

使ひ込む志野の七化け吾亦紅

瓢の実のいのちのうつる鳴りにける

○ 篠原 幸子

よどみなき会話の敬語秋さやか

みちのくの秋を買込む物産店

一木の芯に声あり法師蟬

思ひがけぬ訃を聞く夜や鉦叩

九月尽喜怒哀楽の楽遠く

○ 齋藤 晴夫

はらはらとめつきり減りし稲雀

稲穂垂れふと一寸の念持仏

行き着けど秘する花なし世阿弥の忌

孟宗に風雨狂へる無月かな

野分過ぐ空の涯なる宙の色

○ 神田 恵琳

呉竹の風音捉ふ白露かな (子規庵五句)

子規庭の白き雫やみだれ秋

やや寒や根岸の町の裏の路地

錠前の紋のうす鏗鳳仙花

こと更に深き秋思や仕込杖

春燈の句

安立 公彦選

生身魂手品の種の尽きにけり

長野 木内 博一

稔り田の鯉追ひ上げて落し水

先づ幣を土俵に立てて草相撲

絵巻繰るかりがね寒き真田郷

秋分やまだ日の強き寺の道

秋晴や遠くに泊つる船の窓

騎馬戦の吾子は馬役天高し

さはやかや梢を蹴つて小鳥翔つ

海見ゆる洋館の窓小鳥来る

外人墓地門扉閉ざすや葛の花

秋日濃し外人墓地の坂がかり

爽やかに帽子を振つて出港す

高原の風にさ揺るる秋桜

古里の月の夜路をちちる鳴く

東京 池田 節

東京 坂入 妙香

千葉 小淵 一美江

高原の暮れゆく空や赤とんぼ
露深し草履を濡らす草の径

それぞれの生まれて生きて夕化粧
別るるも出会ふもありて鬼やんま

人間味あふるる人や虫時雨
昭和びとまた一人逝く夏の果

浮かぶもの浮かぶがままに秋の水
深秋やさらさら落つる砂時計

星月夜地にきらめける暮しの灯
いわし雲いくつの別れ経て来たり

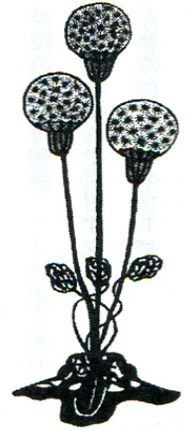
大型の秋刀魚を焼くもひとりかな
生き方の下手なはらから秋ざくら

もの言はぬ笑顔や秋の彼岸寺
夕風の採みゆく波やすすき原

東京 鈴木としお

千葉 海村 禮子

宮城 西川 春子



余言

安立公彦

九二節に、「言羅殿の反橋に…」とある。

この句、一面の紅葉のただ中を流れる小川、その小川に架かる反橋に視線を当てる。この「紅葉」は楓紅葉か。ひときわ明色の紅葉を見ていると、いつしかそこに架かる反橋が反りを大きくしているように見えるという。明解な表現の中に、谷川の景が鮮やかに浮かんでくる。

友恋へば友とふたりの居待かな

諸岡 孝子

三・一一大災害から十九箇月が過ぎた。作者はその大災害の被害を受けた宮城県気仙沼市に住む。被災地を訪ねたことはないが、映像で見る実情は筆舌に尽くし難い。

今宵は居待月。この「友」は災害で逝った友人。その友を思っている、何時しか幽冥に住む友が作者の脇で共に居待の月を見ているのだ。影絵に浮かぶ作者と亡き友。誰も、風さえも這入ることの出来ない心の世界である。同時発表に、〈秋思なほ無明長夜と思ひけり〉がある。ご加餐を祈るばかりだ。尚今年の居待月は十月三日だった。

九月尽人と離れて海を見る

小倉 陶女

「人と離れて」が詩的であり、またリアルである。この句、

神奈川支部大会で特選に頂いた。「九月尽」はもとより旧暦九月の末日。今年の九月晦日は十一月十三日。歳時記の解説

再会やあまた詩友の笑みも秋

小島 禾汀

九月三十日の第一回神奈川大会は盛会だった。幹事の皆さんの周到な準備と、大会に寄せる熱意がみごと実を結んだと言えよう。それも台風の予報の出ている中でのこと。当日参加九十四名は新年大会に次ぐ。

作者は神奈川支部第一回支部長に推された。適役である。このところ二年ほど入院中だったが殆ど快癒。これからの支部運営が期待される。この句、そういう背景を知る者としては、「詩友の笑み」がことに印象に残った。

紅葉中反橋反りを大きくす

末吉 治子

「反橋」という言葉はせいぜい江戸以降のものと思っただが、辞書を見ると『枕草子』に出ているという。その第

にもあるように、現代俳句に詠まれる九月尽是陽曆晦日が多い。この句、まさに陽曆の九月尽である。「人と離れて」もまた陽曆の感じだ。

夫と居て静かな午後や秋の雨

棗 怜子

俳句に夫または妻を詠んだ作品は多い。へ月光にいのち死にゆくひとと寝る 多佳子（『海燕』）はその一つの典型だ。我らが安住先生も良く「妻」を詠んでいる。へ春深し妻と愁ひを異にして、へ夫婦とや春昼手触ることもなし（共に『歴日抄』）。

この句、「静かな午後」が良く効いている。その静けさを導くのが「秋の雨」であり、さらに物静かな「夫」である。夫婦の在り方の一つの日常が静謐に表現されている。

赤い靴履いて誰待つ桐は実に

小山 繁子

この句も神奈川大会での作品。「赤い靴」は野口雨情作詩、本居長世作曲の童謡でよく知られている。横浜駅構内と山下公園にその女兒の像がある、と案内書に書いてあるが見損なつた。「横浜の埠頭から船に乗つて：」、とあるように、港の見える横浜の地には何となく異国情緒が残っている。しかしこの句、「履いて誰待つ」と時代を巻き戻して現代の句にしている。そこに作者の才知を見る。

同時発表のへ海境へ秋日曳きゆく貨物船の句もいい。「海

境」と「貨物船」という次元の異なるものを、良く一句に表現している。

瓢の実のいのちのうつる鳴りにける

藤原 若菜

「瓢の実」或いは「ひよんの笛」と言つても実際に手にした人は多くはなからう。へひよんの笛さびしくなれば吹きにけり 敦、へひよんの笛かはりばんこに鳴らしけり 櫻桃子、などは良く知られている。知られているが読んでそこに立ち止まるという句ではない。

掲出句、読んで立ち止まる句である。それは「いのちのうつろ」の発見による。解説によると、「イスノキの葉に出来た壺形の虫こぶ、その中の虫が飛び出して中空になったものを吹き鳴らすのを「瓢の笛」と呼ぶとある。中七下五に揺曳する一抹の淋しらの思いがみごとだ。

一木の芯に声あり法師蟬

篠原 幸子

鯛と法師蟬はともに秋を連れ来る蟬だが鳴声は大きく異なる。それぞれ最良の俳人も多からう。作者は法師蟬に注目する。ツクツクホーシと呼びかける鳴声も、ジーと鳴き収める声も、ともにその蟬の止まる幹の芯から流れてくると見える。作者にとつては短い刻を鳴く蟬と、悠久の刻を過ぐす大樹は今一体となる。それを「芯に声あり」と表現する。情緒を削ぎ落として好情を呼ぶ句と言えよう。